

# 帆樫成林

—はんしゅうせいりん—

新潟市歴史博物館  
博物館ニュース  
vol.37

## 「帆樫成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。  
人が多く出入りする活気ある「みなと」を  
イメージしました。

## CONTENTS

- 特集1 「開かれた博物館」の、その先へ。 P.2~3
- 特集2 平成二十八年度 春季企画展  
「第四国立銀行展」開催に寄せて P.4
- 歴史さんぽ 松浜橋 P.5
- おすすめの一冊 「[船]からみた四国 近世~近現代の造船・異国船・海事都市」 P.5
- 特集3 みなとびあ古墳部の試み P.6
- 館長日記 託された調査「もうひとつの信州「沼垂」の地名」(下) P.7
- 収蔵資料紹介 「手持現金広運運動」預金額報告書 P.7
- 博物館 あちらこちら 旧第四銀行住吉町支店 イオニア式列柱 P.8



旧税関と桜  
6月から8年の旧税関庁舎の改修工事が始まります。  
この風景、次に楽しむのは平成31年の春です。

新潟市歴史博物館  
博物館ニュース

帆樫成林

Vol.37

## 【たいげんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・対象・参加費
5月15日(日) 14:00~15:30	こども歴史クラブ オリジナルの花押づくり	戦国武将が用いた花押について学んで、自分の花押をデザインしてみよう。	こども歴史クラブの部員が対象です
5月21日(土) 14:00~15:00	糸つむぎをしよう	綿から糸をつくります。種を取ったり、綿をやわらかくしたり、糸を紡いだりする道具を使ってみましょう。	申込み不要・定員なし・無料
5月22日(日) 14:00~15:00	凧をつくろう	簡単に作れてよく上がる凧を作ります。天気良ければ外で凧揚げしてみましょう。	要申込み 5/21まで・15人・100円
5月28日(土) 10:00~12:00 14:00~15:30	みなとびあワラ部 みなとびあもめん部	ワラゾウリの自主練習をします。初心者の方もどうぞ。 糸紡ぎや機織りなど、むかしの手仕事を再現する試みです。	大人向けの活動・部員が対象です もめん部部員が対象です
6月11日(土)・12日(日) 14:00~16:00	みなとびあ界隈プラ ブラ歩き	昔の新潟の街を想像しながら、かつての港町の風情が残るみなとびあ界隈をめくります。	申込み不要・定員なし・無料
6月18日(土) 10:00~12:00	みなとびあワラ部	ワラゾウリの自主練習をします。初心者の方もどうぞ。 ※この日のみ文化財センター旧武田家住宅会場	大人向けの活動・部員が対象です
6月19日(日) 14:00~15:30	こども歴史クラブ 水墨画にちょうせん	墨の濃淡を使って水墨画を描いてみましょう。	こども歴史クラブの部員が対象です
6月26日(日) 13:30~15:00	布を織ってみよう	空き箱を使った簡単な織り器で裂き織りコースターを作ります。	申込み不要・先着15人・無料

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。締切は必着です。プログラムは予定となっておりますので、詳細は当館までお問い合わせください。

### 現在開催中の企画展

#### 第四国立銀行展

新潟県最初の銀行である第四国立銀行を軸に、新潟の近代の発展やその歩みを紹介します。

会期 2016年4月9日(土)~5月29日(日) 休館日 5/16(月)・23(日)

観覧料 一般500円 高校生・大学生300円 小学生・中学生200円  
\*小・中学生は、土日・祝日無料

主催 新潟市歴史博物館 関連事業 展示解説:毎週日曜日 午後2時~(40分程度)

### 博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。

【時間】13:30~15:00 【会場】本館2階セミナー室

【申込】不要(当日受付・定員80人程度)

【資料代】100円(資料のない回は無料)

- ◆5月の講座:5月22日(日) 講師:中村 里那  
「画題でよみとく五十嵐淡明」
- ◆6月の講座:6月26日(日) 講師:森 行人  
「ヨシ(葦)を考える」

### 博物館 あちらこちら

旧第四銀行住吉町支店  
イオニア式列柱

昭和2(1927)年に竣工した建物は、外壁に花崗岩を積み、正面入口にイオニア式の柱を4本並べて、堅固で荘厳な印象を与えます。イオニアは古代ギリシアの一地方で、小アジア西岸部(現トルコ)およびエーゲ海東部の諸島をさしました。この地方で成立した円柱の様式がイオニア式で、柱頭の渦巻き装飾が特徴です。昭和初期の銀行建築には、このような古代ギリシア・ローマ風の様式が多く見られます。



■ 帆樫成林「はんしゅうせいりん」第37号  
■ 編集・発行/新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
■ 印刷/株式会社ウエッザップ

■ 発行日 平成28年5月13日

### 次回企画展

#### 現代新潟風景画展 ~小柳俊郎の詩とともに~

当館の前身である郷土資料館が毎年開催していた「現代新潟風景画展」に出展され、現在当館で所蔵している絵画作品をご紹介します。昭和の詩人・小柳俊郎の詩編とともに楽しんでください。

【会期】2016年6月11日(土)~19日(日)

【休館日】6/13(月)

【観覧料】無料 \*常設展の観覧は有料です。

【主催】新潟市歴史博物館

## お知らせ

### 旧新潟税関庁舎の改修工事がはじまります

明治2(1869)年に建てられ、新潟港開港当時の様子を伝える旧新潟税関庁舎は、6月より改修工事が始まります。工事が終了する平成30(2018)年(予定)まで、見学ができなくなりますのでご注意ください。

### 編集後記

37号では、春季特別展「第四国立銀行展」についてご紹介しました。ぜひ、これを機に敷地内に移築された旧第四銀行住吉町支店もご見学いただきたいと思えます。一方、旧新潟税関庁舎は、6月から改修工事のため見学ができなくなります。開港150周年に向けて、また永く後世へ伝えていくため、なにとぞご理解いただきますようお願いいたします。(中村)

### お問い合わせ・申込みは博物館まで...

#### 新潟市歴史博物館 みなとびあ

住所: 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
Tel: 025-225-6111 Fax: 025-225-6130  
E-mail: museum@nchm.jp http://www.nchm.jp  
【休館日】毎週月曜日、祝日の翌日・年末年始(12/28~1/4)  
【開館時間】(4-9月)9:30~18:00 / (10-3月)9:30~17:00



みなとびあ歴史発見プロジェクトは、こどもからおとなまで幅広く、みなとまら新潟の歴史に親しみ、自ら歴史を発見する喜びを知ってもらい、まもなく開港150周年を迎える新潟の街をみんなで盛り上げていこう!という事業です。

「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。



# 「開かれた博物館」の、その先へ。

木村 一貫

開かれた博物館——。こんな言葉をおそらく多くの人が一度は耳にしたことがあるのではないだろうか。

日本では文化行政のキャッチフレーズに使われてきた感がありますが、その源をたどるとフランスに行き当たります。昭和六十一（一九八六）年、パリに本部をおく国際博物館会議（ICOM）が、ユネスコの勧告に基づいて「博物館はあらゆる人々に開放されなければならない」という原則を示したのです。それから三〇年。「地域に開かれた博物館」



図1 ミ・ホイットニー美術館の視覚障がい者向けガイド (Whitney Museum of American Art, 2015)

をめざす当館も、世界の博物館と価値を共有しているといえるでしょう。

ただ、現在のような博物館ができたのは、ヨーロッパでは十九世紀初頭、日本でも明治初頭のことです。その時からすでに「あらゆる階層」に公開されてきたから、問題は、開かれた扉の「その先」にあるはず。つまり、年齢や興味、知識の度合い、ハンディキャップの有無にかかわらず、すべての人がひとしく、それぞれに充実した体験的価値を得ているかどうか、ということでしょう。

この三〇年を振り返ると、多くの博物館が敷居を下げる努力をしてきました。たとえばアメリカやイギリスは教育施設としての自覚を再確認し、多民族・多文化社会に対応する徹底した利便性の向上を研究してきました（図1）。いっぽう日本では「地域との連携」をキーワードに、市民の立場に立った柔らかな博物館を志向してきました。ただ、その理念を「展示」の現場にどう反映させるか、という課題は残されていそうです。

展示を通して知識を広める営みは古くからあり、紀元前五百年ごろの新パビ



図2 17世紀デンマークの医師オレ・ヴォルムの部屋 (Museum Wormianum, POLITIKEN 9. OKT, 2011)

ロシア王国にはキャプション（展示解説文）のような碑文があったといわれています。しかし近代的な博物館展示の直接のルーツは、逆説的ながら——「見せない」ことを前提にしたものでした。それは盛期ルネサンス以降、ヨーロッパで流行した珍品奇物の個人コレクション、いわゆるヴァンダーカンマー（驚異の部屋）です（図2）。そこでは人魚のミイラといった怪しげなものも収集されましたが、科学の進歩とともに、その閉じられた愉悦の世界は衰退します。しかし中には教育のために後世に引き継がれたものもあり、それがオックスフォード大学のア

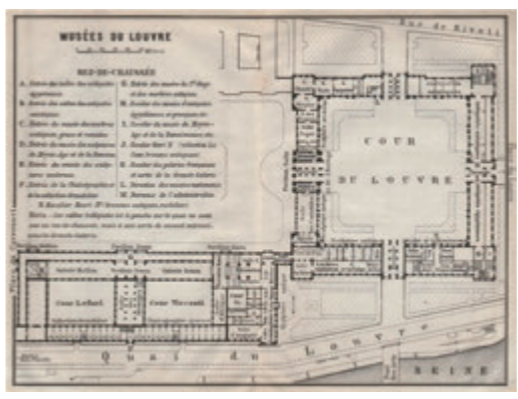


図3 ルーブル美術館1階のフロアマップ (Wagner & Debes, 1907)

シユモレアン博物館や大英博物館、ルーブル美術館になったのです。

特にルーブルは象徴的です。フランス革命で王室コレクションもろとも宮殿が美術館として公開されたことはよく知られていますが、注目したいのはその後の「展示」の変化です。開館当初はヴァンダーカンマーそのままに混沌とした状態でしたが、ナポレオンの遠征で他国から集めた作品が増え、年代や傾向で再編成する必要に迫られました。お宝という「群」が解体され、系統立てた作品本位の展示が始まったのです。

建物も観覧行動を規定しました。も

とも宮殿だったルーブルは、独立した部屋が幾重にも連なる複合施設のようなものでした（図3）。ルーブルに限りません。宮殿や邸宅を引き継いでいるヨーロッパの博物館は、全体を通して順番にまわるより、お目当ての部屋をゆっくり観覧するのに向いているのです。

たとえば十九世紀イギリスで発行された「国内博物館&美術館ガイド」には、次のような「観覧のマナー」が掲載されています（筆者抜粋訳）。

- たくさんみないこと。数をかせぐより一つの資料に集中しましょう。
- 気になる資料を追及しましょう。
- 来るたびに新しい発見があります。
- 時間をかけて何度も観察し、深く考えを巡らせましょう。

ここでは観覧者が、自分の意思で選択的に展示物にアクセスすること、また「量」より「深さ」を大切にすることが促されています。展示空間が、ヨーロッパでは早くから教育活動に開放されてきたことの表れでしょう。では近代の日本では、どのように展覧会が立ち現れ、受容されてきたのでしょうか。

\* \* \*

博物館なるものが浸透していなかった明治時代に、日本人がまず体験した「展覧会」は、博覧会や共進会でした。その導入を進めたのは、慶応三（一八六七）年パリ万国博覧会を訪れた



図4 19世紀半ばのサウス・ケンジントン博物館 (The Illustrated London News, 1857)

人たちがでした。特に、ロンドンのサウス・ケンジントン博物館（図4）と独自の交流をもった佐野常民は、同館をモデルに「早く効率よく」知識を普及する展示を構想します。こうして明治十（一八七七）年第一回内国勸業博覧会を皮切りに全国に物産陳列所のネットワークがつけられ、産業振興目的の催事が、各地方で開かれていったのです。

新潟でも明治三十四（一九〇二）年に「二府十一県連合共進会」が開かれました。共進会は本来、産業製品の品質を競う催しですが、審査長は「総ての階級の人々、即ち田夫野嬢まで吸収」する方法を検討し、来場者数をかせぐように求めました。そのため会場の白山公園には茶店や演芸場、見世物やピアノホールまで出店し、老若男女を問わず日に四千人の観衆が押し寄せたのです。

会場は、共進会を誘致するために新築された物産陳列所で、展示室は広く

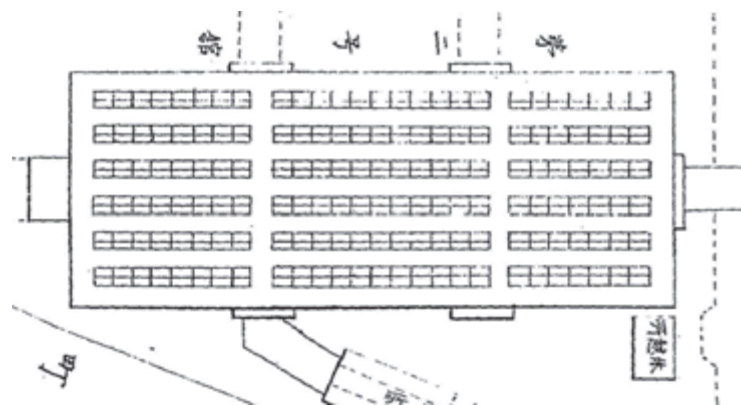


図5 共進会会場(第二号館)の平面図 (新潟県主催一府十一県連合共進会報告, 1902)

フラットでした。そこに各府県の陳列ケースが所狭しと並べられ（図5）、観覧者は身動きがとれないまま、群衆の流れに乗るように会場をまわったようです。当時の新聞には、時間内にすべてを効率よくまわる順路まで掲載されました（図6）。

日本でも、教育利用を目的とした博物館は早くからつくられました。海外の事例が紹介され、研究が本格化するのには大正時代半ばのことです。殖産興業という国の意図が強く働いていた当時は、二度に多くの人が訪れる状況こそ歓迎されたのです。人々は祝祭的气氛を求めて入場料を払い、一つでも多くの

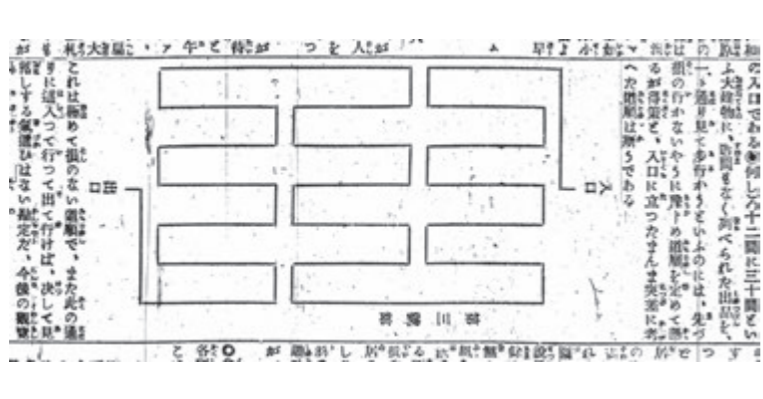


図6 第二号館観覧順序の提案記事 (新潟新聞 明治34年8月14日)

ものを見ようと列を成したのでしよう。

「周辺」に様々なサービスを用意し、「展示」への関心を盛り上げるといっては、博物館体験に導くいわばオルタナティブなきっかけづくりといえるでしょう。これは展示の空間をつくる上でも応用できるかも知れません。観覧の目的や対象、興味の濃淡、その他さまざまな事情にあわせた選択肢を用意する意識改革が、今後の課題でありそうです。

（きむら ひとやす 学芸員）

# 「第四国立銀行展」開催に寄せて

安宅 俊介

開港五港の新潟では、新しい西洋の文物が進んで取り入れられました。

その一つが「銀行」でした。銀行は、お金を集めて流れをつくり、ひろく社会へ行き渡らせることで、経済・産業の発展を促す重要な役割を近代日本のなかで担っていました。新潟には、日本の銀行史において、黎明期とも呼べる時期に誕生した銀行がありました。第四国立銀行、現在の第四銀行です。

明治五（一八七二）年十一月、明治政府は、政府紙幣の整理と金融制度の発達を目的に、国立銀行条例を制定しました。この条例は、アメリカ・ワシントンを見学した伊藤博文が、同国のナショナル・バンクにならって建議したものです。

国立銀行とは、国が設立・経営する銀行ではなく、国法によって立てられた民間銀行です。それぞれの銀行が、表示された額面と同額の価値を持つ正貨（金貨や銀貨）との引き換えが保証された兌換紙幣である国立銀行紙幣を発行することができました。

この条例の制定にあたっては、当時、大蔵少輔だった吉田清成などからは、イギリスをはじめとした中央銀行制度を導入すべきとの反対意見も出されましたが、江戸時代以来の、地方分散的な日本の金融構造が、当時のアメリカの状況

により近いと判断され、同制度の導入が決まりました。条例の実質的な編成は、大蔵大丞であり、後に日本最初の国立銀行である東京第一国立銀行頭取に就任する渋沢栄一、紙幣権頭の芳川顕正らが担いました。

この国立銀行条例に基づいて設立された銀行が、東京第一、横浜第二、新潟第四、大阪第五の国立銀行四行でした。大阪第三は、発起人たちのあいだで対立が起ったため、開業に至りませんでした。このため、第四国立銀行の開業免状には「第三番」と記されています。

第四国立銀行の設立は、新潟県令の楠本正隆の督励のもと、新潟港の商人たちが中心となって進め、蒲原平野の地主たちが設立発起人に加わりました。初代頭取には、発起人の一人でもあった、水原町の巨大地主市島徳次郎が就任しました。

さらに、県内を中心に三五三人の株主を得ました。株主は、東京第一が七十一人、横浜第二が二十九人、大阪第五が二十九人であったため、他の国立銀行と比べて、たいへん多い人数です。第四国立銀行は、ひろく地域の富を集めて、大都市以外ではじめて成った銀行、という特徴が見いだせます。営業は、明治七

（一八七四）年三月に開始されました。

その後、国立銀行条例が改正されて、国立銀行の設立が容易となったこともあり、全国で国立銀行が次々と生まれました。国立銀行は、明治十二（一八七九）年までに全国で一五三行を数えます。これらは、行名に設立順の番号を冠しているため、ナンバー銀行とも呼ばれます。

また、士族が秩禄公債を投資し、これを設立資本とした銀行が多かったため、「士族銀行」とも呼ばれました。このため、国立銀行は旧城下町に設立される場合が多く、新潟県では第四以外の国立銀行は全て旧城下を本拠地にして生まれています。

設立されたのは、現在の北越銀行の前身である長岡第六十九国立銀行、後に第四銀行に合併される村上第七十一国立銀行、新発田第六十六国立銀行、高田第三十九国立銀行の四行でした。

明治十五（一八八二）年、中央銀行である日本銀行が作られ、兌換紙幣の発行が一元化されました。これにともない、国立銀行は、普通銀行へ転換していくこととなります。第四国立銀行は、明治二十九（一八九六）年、普通銀行である新潟銀行へと改組しました。そして、大正六（一九一七）年には国立銀行時代

の行名「第四」に戻しました。「第四」は現存する国立銀行時代の銀行商号のなかでは最古のもので、本展覧会では、こうした長い歴史をもつ第四を中心に、明治・大正・昭和期の新潟における銀行やお金に関する資料を紹介します。（あたか しゅんすけ 学芸員）



明治13(1880)年の新潟大火後に建てられた第四国立銀行本店 第四銀行蔵

## 歴史さんぽ



### 松浜橋

新潟市北区松浜 — 東区下山

享保16(1731)年、阿賀野川の排水路が壊れて河口となり松ヶ崎浜村は分断されます。両岸は渡船で結ばれることとなりました。明治時代になっても橋は架けられず、渡船場が左岸側では通船川河口付近に、右岸側は現在の松浜集落内に設けられていました(写真1)。

明治末以来、新潟の市街地や工場で労働力需要が高まると、渡船の利用者も増えていきました。そうした中、昭和14(1939)年11月1日、昭和17年11月29日の二度、渡船転覆事故が起こります。この事故を受けて松ヶ崎浜村は架橋を決断し、戦時中にもかかわらず、工事は断行されました。二度目の事故の翌年、昭和18年7月24日に左岸の中州まで、約310mの部分が開通し、「松浜橋」と名付けられました。昭和21年7月に両岸まで延長され約670mとなりました。橋は木造で幅約4.5m、当初は通行料がかかりましたが、昭和22年12月に県に移管されると無料になりました。



写真1 阿賀野川右岸の渡船場(新潟市蔵)

この橋は破損しやすく、また自動車は交互通行、バスは通行不可で、老朽化するにつれ不便さが目立つようになりまし。新橋は、昭和34年に旧橋の100m河口側で工事が始まります。しかし、旧橋は新橋の完成を待たず昭和39年6月の新潟地震で落橋してしまいましたが、昭和39年12月19日に開通しました。これが現在の松浜橋で、橋長921m、幅員6mの鉄鋼トラス橋です。昭和49年には歩道が増設されて現在の姿に至っています。

現在、渡船場や旧橋の跡はありませんが、松浜の町中には、渡船事故を含む阿賀野川の水難事故犠牲者を慰霊する石地藏や、旧橋の右岸橋詰に繋がっていた道が残されています。車で渡れば数分もかからない松浜橋ですが、ここに至るまでには苦難の歴史があったのです。

田嶋 悠佑 (たじま ゆうすけ 学芸員)



写真2 新潟地震で損壊した松浜橋(新潟市蔵)

### おすすめの1冊

#### 「船」からみた四国

近世・近現代の造船異国船・海事都市

四国地域史研究連絡協議会は、四国内の歴史民俗研究団体の有志が集い、各県持ち回りで四国に関するテーマで大会を開催しています。二〇二三年度大会は「船」からみた四国をテーマに香川県で開催されました。本書にはその成果をもとに、船に関わる五つの論稿が収められています。瀬戸内海の造船技術を広くアジアの事例の中に位置づけ、高松藩の保有船から江戸時代初期の船団構築と海防を論じ、また阿波国における異国船対応を村・郡代の視点から描き、海事産業が盛んな今治のルーツを船を手掛かりに論じるなど、船という同じ切り口から多様な地域の歴史を描いています。第二章には日本の造船史を広く概観した論稿を配し、船をテーマとして論じる上で前提となる知識を提供しています。新潟においても船は重要なキーワードです。本書の多様なアプローチは、新潟開港二五〇周年を間近に控え、新潟の歴史を問い直していく上で大変参考になります。

(森 行人 学芸員)



四国地域史研究連絡協議会編  
岩田書院  
2015年9月

